

2023 年度
修士学位請求論文要旨

異文化の他者と共に学び合う場づくりにおける

児童のパフォーマンス

—共生をめざすインターネットを活用した異文化間交流学習を事例として—

国際日本学研究科 国際日本学専攻
多文化共生・異文化間教育研究領域
4911223002

田中真菜

本論文では、初等教育におけるインターネットを活用した異文化間の交流学习において、異なる文化的背景を持つ児童同士が共に学び合える場をどのように創造するのかを明らかにする。本研究では、児童が異文化の他者と共にちょうどよく学び合える場をつくっていくことを「共生のパフォーマンス」と定義した。本研究における「共生」を定義するために用いた「ちょうどいい」という表現は、イヴァン・イリイチの「コンヴィヴィアリティ (conviviality)」の議論をもとにした。

第1章では、研究の背景として、インターネットを活用した異文化間の交流学习が実践される背景、および、共生をめざす実践としての異文化間の交流学习に関する議論を踏まえ、教育の実践を通じた児童の学びを「共生のパフォーマンス」の観点から捉える意義について論述した。第1章1節では、インターネットを活用した異文化間の交流学习がはじまり、広がっている二つの背景を示した。ひとつは、情報化社会の発展に伴い学校教育のICT環境が整備され、児童が他の学校や地域、国の人たちと直接関わることができる学習活動が可能になったことである。もうひとつは、多文化共生をめざす異文化理解教育への関心の高まりである。これまで、学校教育で実践されてきた異文化理解教育または国際理解教育では、文化の本質的理解を中心とした教育活動が中心であった。しかしながら、外国の文化や人を扱う教育の実践については、それらを一方的に「知る」ことだけでなく、人との関わり合いを通じて双方向的に変化する「共生」を経験しながら学ぶ必要性が議論されている。以上のことから、次に続く第1章2節では、異なる文化的背景を持つ児童同士が直接関わり合うことを通じて、自分たちで共に学び合える場をつくっていく、教育の実践への期待と可能性を論考した。しかしながら、インターネットを活用した異文化間の交流学习に関する先行研究では、何をもって児童が「共生」できるようになったとするのか、教育の実践を共生の観点からどのように評価できるのかについて十分に検討されていない。そこで、第1章3節では、イヴァン・イリイチの「コンヴィヴィアリティ」の定義とその解釈に関する議論をもとにして、教育の実践における「共生」を捉えるために「ちょうどいい」という表現を用いる意義を示した。人々がその本来性を失わず、互いに差異を楽しみながら、創造性を発揮できる「ちょうどいい」関係を共生とする「コンヴィヴィアリティ」の概念は、異文化間の交流学习において児童が経験することができる、共に学び合える場の創造と重なる。このような議論を踏まえ、異なる文化的背景を持つ児童同士が共に学び合える場をどのように創造するのかを「共生のパフォーマンス」という概念から捉えていくことを論じた。また、本研究で用いた「パフォーマンス」の概念は、ロイス・ホルツマンのパフォーマンス・アプローチ心理学での議論にもとづいている。

第2章では研究の目的と意義を示した。本研究では、インターネットを活用した異文化間の交流学习を事例とし、異なる文化的背景を持つ児童同士が共に学び合える場を創造するプロセスを「共生のパフォーマンス」の観点から明らかにすることを目的とした。本研究の学術的意義は、インターネットを活用した異文化間の交流学习を「共生」の観点から分析し、評価した点である。多義的に用いられる共生の概念を整理し、異文化間の交流学习を共生の観点から分析する視座として「共生のパフォーマンス」を示し、その観点から事例を評価した。実践的意義としては、

児童が共生のパフォーマンスをするようになるプロセスにおいて、教師が果たす役割を明らかにしたことである。インターネットを活用した異文化間の交流学習の経験がある教師は、児童が異文化の他者と共に学び合える場を自ら創造するプロセスにおいてどのような介入をしたのかを明らかにできたことは、共生をめざした、インターネットを活用した異文化間の交流学習のデザインの一助になるだろう。

第3章では、本研究で事例とするインターネットを活用した一年間の異文化間の交流学習の概要を詳述した。本実践は、大阪の私立の小学校と東京のネパール人学校の5年生の交流学習である。交流学習の中心的な活動は5回行われたZoom交流で、第1回、第2回はクラス単位、第3回以降はグループ単位で両校の児童が英語を使って交流した。第1回から第3回までは互いに質問し合う活動が中心的に行われ、第4回以降は、防災をテーマとして学び合う活動が行われた。本研究では、主に第1回と第5回における児童のパフォーマンスを比較し、変化とそのプロセスを分析した。

第4章では、研究の方法として、データの収集と分析について示した。筆者は、本実践に両校から参加し、参与観察、インタビュー、児童の振り返り記録の三つの方法でデータを収集した。本研究では、参与観察で収集した活動の様子動画のデータを中心に、児童の言動の変化を「共生のパフォーマンス」の観点から分析した。また、児童の「共生のパフォーマンス」を促すための教師の介入について分析した。分析の際には、質的データ分析ソフトウェアのMAXQDAの動画分析機能を用いてオープンコーディングを行い、意味のまとまりごとにカテゴリー化し、カテゴリー間関係を捉えながら考察を行った。

第5章では結果と考察を示した。まず、一年間の交流学習の中で起こった児童の変化のプロセスには、活動の意識が集団的になることで起こる変化と相手理解が複雑化することで起こる変化があったことを示し、共生のパフォーマンスとして評価できる観点を考察した。そして、教師の介入には、児童の活動に合わせた、教師の働きかけの5つの段階があることを明らかにした。そして、教師が「経験の機会」を与える働きかけと「考える視点」を与える働きかけのふたつを繰り返しながら段階的な働きかけを行っていたことを示し、児童の共生のパフォーマンスのための教師の介入の特徴を考察した。

第6章では、まとめとして、結果と考察から明らかになった三つの特徴を示した。分析の結果、児童が交流相手と共にちょうどよく学び合える場を創造するようになるプロセスには、(1) 児童が活動を自由に生み出せる環境があること、(2) うまくいかない経験を通して、交流相手への関心を深めていくこと、(3) 多様な方法を試し、工夫することの三つの特徴があることが明らかになった。本論文では、児童が自分たちの手で交流相手と共に楽しめる活動を生み出したり、自分たちなりのコミュニケーション方法を見つけ出したりしたことを示したが、この背景には児童が自分たちで活動を自由に生み出せる環境があった。そして、このような環境で児童が「うまくいかない」経験をすることこそが、交流相手について深く知る契機となり、双方が共に楽しめる場を創造することにつながった。加えて、児童がコミュニケーションのための多様な方法を試したり、工夫したりできた背景には、本実践以外の日々の授業実践での経験があった。例

えば、ICT 端末を使った説明やグループとしてのコミュニケーションは日々の授業で経験していたことであった。研究の背景で示したように、教師によってデザインされた場において児童が「うまくいく」交流を経験するのではなく、児童が主体となり、異文化の他者との関わり合いの中で直面する「うまくいかない」経験を契機に、自分たちの手で「ちょうどいい」方法を見つけ出し、新しい活動を創造していったことは、共生のパフォーマンスであるといえる。

最後に、第7章では、本研究における課題と展望を示した。ひとつは、本研究を通して構築したモデルを他の事例と比較検討しながら検証することである。特に、教師が児童の活動への介入を変化させる判断をどのように行ったのかをさらに検討することは、共生をめざす教育の実践をデザインする上で有用な知見となるだろう。次に、本研究において分析対象とならなかった日々の教育実践との関連を明らかにすること、交流相手の変化を調査することも課題として残った。インターネットを活用した異文化間の交流学習を「共生」の観点から分析することの意義を本論で示したが、事例はまだ少ないため、今後、事例研究を積み重ねていきたい。